

じいち<sup>や</sup>んのお米とぼくたちの成長

養蚕小学校 五年 稲川 聖英

っ えんり<sup>よ</sup>しないで持つてきな。お米好き

なのはいいことだろう<sup>レ</sup>。

じいち<sup>や</sup>んは、いつもそう笑いながら、お米

を一袋車に乗せてくれる。

ぼくの家で食べているご飯は、じいち<sup>や</sup>ん

が作ったお米だ。種まきや田植え、稲かりの

時は、お父さんとお母さんも手伝うけれど、

それ以外の準備や後かたづけ、管理やお世話

は、じいち<sup>や</sup>んが一人でやっているのを知っ

ている。だから、なおさらおいしく感じて、

すぐにお米がなくなってしまうのだ。

ぼくだっ、て、もう五年生。お父さんほどで

はないけれど、一人前くらいペロ<sup>ッ</sup>と食べて

しまう。おかわりをすることだっ、てある。朝

は必ずご飯を食べてパワーをつける。授乳中

のお母さんも、

っ 栄養つけなくち<sup>や</sup>ね<sup>レ</sup>。

と、バランスのとれたおかずと一緒にご飯を

いっばい食べる。みんなで

っおいしいね。

と、ご飯をほおばると、自然に笑顔がこぼれる。

そして、生後六カ月の妹。ぼくが夏休みに入る前くらいから、り乳食が始まった。お風呂ごろになると、お母さんは妹におかゆを作って食べさせる。ぼくが想像していたよりもトロドロだ。テーブルに置かれると、妹は手足をばたつかせてこうふんしている。お母さん

が、スプーンで口に運ぶが舌でおし出してしまった。それなのに、もつとちようだいと言わんばかりに、スプーンやおわんを自分で持とうとして、一回にぎったらはなさない。おかゆのついたスプーンをずとなめている。あぶないから、て、手からはなすと、今度は立ち上がろうとして前のめりになっている。ぼくは、大笑いした。

っまだ上手にぎっくんできないけど、ご飯の味が好きなんだろうねえ。やっはりご飯は基

本だからね。」  
と言った。

そして、ぼくは、妹の残したおかゆを少し  
食べてみた。何の味付けもされていないから  
その気ない味だ。正直、おいしいとは思えな  
かった。けれど、後からほんのり甘い味が、  
口に広がった。なつかしいような、やさしい  
ような感じだった。

ぼくが赤ちゃんのところも、こうしてお母さ  
んは、おかゆを食べさせてくれていたんだ。  
大きくなっただけからも、毎日毎日ご飯をたいて  
おいしい食事を作ってくれてきたんだ。そし  
て、ぼくは十年間、じいちゃんが作ったお米  
を食べ続けてきたんだ。そう思うと、感し  
の気持ちでいっぱいになった。ぼくの大切な  
妹も、これからじいちゃんのお米を食べて大  
きくなっっていくんだろ。ありがとう。  
じいちゃん。そして、妹へ。いっぱい食べて  
早く大きくなあれ。